

蔵訳『阿闍世王経』第三章後半部分訳注研究

宮崎展昌

はじめに

本稿は、2019年3月に公表した「蔵訳『阿闍世王経』第三章前半部分訳注研究」（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第36号掲載、以下「前稿」と略称）に続くものであり、同経第三章の後半部分について扱う¹。これまで同様、現存する同経の蔵訳の暫定的な批判校訂本にもとづく訳注研究である。

同経第三章の概要や編纂事情については前稿の冒頭で紹介したので、本稿では割愛する。前稿を受けて、本稿では第12節から末尾までを扱うが、第18節までは、前稿に引き続いて、釈尊が放擲した鉢にまつわる物語である。第19節以降では文殊と釈尊の前世の物語が展開し、第26節では第三章の冒頭で登場した「退転しそうな二百の天子」が再登場して無上正等覚に向かうことを発心し直す、という概要になっている。特に、文殊と釈尊の前身譚の末尾部分（第25節）で語られる「文殊は諸仏の母である」という記述は本経のなかでも比較的よく知られた記述ではないだろうか。

前稿でも述べたように、本稿で扱う〈阿闍世王経〉第三章については、すでに Harrison [2004] として、蔵訳からの堅実な英訳が公表されているが、同書は一般向け書籍という性格からか注釈が省かれており、前稿および本稿で注釈付きの和訳研究を公表する意義は一定程度確保できるものと

1 既発の訳注研究でも注記したように、訳者は現在〈阿闍世王経〉全体にわたる蔵訳の批判校訂版とそれにもとづく訳注研究および諸訳対照本の公表にむけて準備している。それに先行して、同経各部分について、蔵訳からの訳注研究を試みに提示し、諸先学の御批正を仰ぎたい。

信じる。

訳注の方針

本稿でも、前稿までの方針を基本的に踏襲するが、一部改めた箇所もあるので再掲する。

前稿同様、本稿でも〈阿闍世王経〉の蔵訳テキストからの現代語訳を提示する。依拠する蔵訳テキストは筆者が現在準備を進めている、暫定的な批判校訂本²とし、用いた蔵訳資料の間に重大な異読がみられた場合は注記する。言うまでもなく、同経の蔵訳テキストは翻訳文献であるので、そのもとになったであろうサンスクリット語文を可能な限り想定することを試みる。以下、その他の点について箇条書きで記す。

- **〔分節〕** 訳者の判断にもとづいて、前後で話題や場面が切り替わるとみられる箇所では節に区切り、適当な見出しを付ける。
- **〔想定梵語〕** 原則的にアスタリスクを付して記す。ただし、紙数の関係から、*Mahāvīyutpatti* から想定可能なものは訳文中の括弧内に想定サンスクリット語を記すのみとし、その典拠は割愛する。漢訳諸本における、相当する漢訳語も併記したほうがよい場合などはその典拠もあわせて注記する。
- **〔固有名〕** 紙数の関係から、本稿では想定サンスクリット語からのカタカナ表記は初出時に示すのみとし、繰り返される場合は相当する漢訳語を借用するか一般に知られる漢訳の固有名を用いることにする。(ただし、第三章の前半部分で既に登場している人物の固有名については、前稿で提示した漢訳語名を引き続いて用いる。)
- 相当する現存漢訳諸本、特に支識訳および竺法護訳と蔵訳との間に

2 現時点では、後出の略号表に掲げる16種のカンギュル資料を用いて、蔵訳〈阿闍世王経〉の批判校訂本を準備している。校訂本の作成にあたっては便宜的にロンドン写本カンギュルを底本としている。

注目すべき異同が見られる場合は重点的に注記する。早くとも9世紀頃に成立した蔵訳本に比べてかなり古く、系統を異にするとみられる上記両漢訳は、同経のより古い姿を探る上で貴重であり、それらの異同を詳細に調査し、記すことは極めて重要である。

略号および使用テキスト

- AksN *Akṣayamatinirdeśasūtra*, Jens Braarvig ed., 2 vols., 1993.
- BHSD *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, F. Edgerton, ed., 1953. (Reprint: Rinsen Book, 1985)
- DKP *Druma-kinnara-rāja-pariprcchā-sūtra: A Critical Edition of the Tibetan Text (Recension A) Based on Eight Editions of the Kanjur and the Dunhuang Manuscript Fragment*, P. Harrison, ed., 1992.
- Gv *Gaṇḍhavyūha*, P. L. Vaidya ed., 1960.
- LCTSD Lokesh Chandra ed., *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, 1959–1961 (Reprint: Kyoto, 1976)
- Lv *Lalita vistara: Leben und Lehre des Çākya-Buddha: Textausgabe mit Varianten-, Metren- und Wörterverzeichnis*, von S. Lefmann ed., 2 vols., 1902–1908.
- MVy *Mahāvīyūtpatti*, 榎亮三郎編著 『梵蔵漢和四訳対校翻訳名義大集』 1916–1925. (Reprint: 国書刊行会、1981)
- Negi Negi, J. S. *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, 1993–2005.
- PTSD *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*, T. W. Rhys Davids and William Stede eds., 1921–1925.
- PvP *Pañcaviṃśatisatasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Nalinaksha Dutt ed., 1934. (Reprint: Calcutta, 2000)
- RGV *The Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra*, E. H. Johnston ed., 1950. (Reprint: Delhi, 1991)
- Skt.fr. Harrison and Hartmann [2000]

SP *Saddharmapuṇḍarīka*, Kern, H & Bunyiu Nanjio eds., 1912.

T. 大正新修大藏經

蔵訳〈阿闍世王経〉諸本³

A	タブ (Tabo) 寺写本	No. 1.4.15.1 (Running No. 26); Ke 32, 45, 47, 50-51, 53, 61, 61-75, 77-79b2.
B	ベルリン写本	No. 224: mdo sde, Tsha 275b5-343a2.
Ba	バスゴ (Basgo) 写本	No. 49.2: mdo, Nga 76a2-160b4.
Bth	バタン (Bathang) 写本	No. 57: Pa 150a6-199b1.
D	デルゲ版	No. 216: mdo sde, Tsha 211b2-268b7.
G	ゴンドラ (Gondhla) 写本	No. 26, 01: Kalb-51a5.
He	ヘーミス (Hemis) 写本 (I)	No. 48.1: mdo, Nga 133-157a6. (第X章の途中より)
Hi	ヘーミス (Hemis) 写本 (II)	mdo, Nga 77-81, 91-92, 95, 100, 114-118, 148-152a1.
J	ジャンサタン (リタン) 版	No. 159: mdo sde, Tsha 234b2-295a6.
L	ロンドン写本	No. 166: mdo sde, Za 273a7-354a6.
N	ナルタン版	No. 201: mdo sde, Ma 339a4-427b6.
P	大谷北京版	No. 882: mdo sna tshogs, Tsu 220a5-281a5.
Ph	プクタク (Phug brag) 写本	No. 289: mdo sde, Ke 1b1-85b3.
S	トク宮 (Stog Palace) 写本	No. 223: mdo sde, Za 266b7-351a7.
T	東京写本	No. 223: mdo sde, Za 247a8-321a8.
U	ウランバートル写本	No. 272: mdo sde, Za 237b4-312b8.

3 チベット大藏經カンギェル諸本の〈阿闍世王経〉の情報については、ウィーン大学 Department of South Asian, Tibetan and Buddhist Studies に置かれたプロジェクト The Tibetan Manuscripts Project Vienna (TMPV) が作成したデータベース The Resources for Kanjur & Tanjur Studies (rKTs; <https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/sub/index.php>: 2019年5月25日確認) を利用した。

〈阿闍世王經〉漢訳諸本

- 【識】 支婁迦讖訳『阿闍世王經』(大正新修大藏經 No. 626)
【護】 竺法護訳『普超三昧經』(大正新修大藏經 No. 627)
【天】 法天訳『未曾有正法經』(大正新修大藏經 No. 628)
【放】 失訳『放鉢經』(大正新修大藏經 No. 629)

参考文献

- Harrison, Paul [2004] “How the Buddha become a *Bodhisattva*,” *Buddhist Scripture*, Donald S. Lopez ed., Penguin Books, London, pp. 172-184.
- Harrison P. and Hartmann J. U. [2000] “*Ajātaśatrukaukṛtyavinodanāsūtra*,” *Buddhist Manuscripts I, Manuscripts in the Schøyen Collection*, Vol. I, Hermes Academic Pub., Oslo, pp. 167-216.
- 梶山雄一・丹治昭義 [1994] 『さとりにへの遍歴』中央公論社、東京。
- 定方 晟 [1989] 『阿闍世のさとりに一仏と文殊の空のおしえ』人文書院、京都。
- 高崎直道 [1989] 『宝性論』(インド古典叢書2)講談社、東京。
- 高崎直道校注 [1993] 「維摩經」(新国訳大藏經9「文殊經典部」2)大蔵出版、東京。
- 高崎直道 [2009] 『如来蔵思想の形成』(高崎直道著作集第4・5巻、初出1974年)春秋社、東京。
- 星 泉 [2016] 『古典チベット語文法—『王統明鏡史』(14世紀)に基づいて』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京。
- 松田祐子 [2002] 「ヴァイシャーリー疫病譚における傘蓋供養」『日本仏教学会年報』第67号、pp. 129-140.
- 松濤誠廉・丹治昭義・桂紹隆訳 [2001] 『法華經Ⅱ』(大乘仏典5、初出

- 1976年、新訂版1981年)、中央公論新社、東京。
- 宮崎展昌 [2012] 『阿闍世王経の研究—その編纂過程の解明を中心として』山喜房佛書林、東京。
- [2016] “Highly Effective Practices in the *Sahā* World: Similar Accounts Found in Four “Manjuśrī Sutras” and Other Mahāyāna Sutras,” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 64-3, pp. 1171-1177.
- [2017] 「蔵訳『阿闍世王経』第Ⅱ章訳注研究」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第34号、pp. 77-97。
- [2018a] 「蔵訳『阿闍世王経』第Ⅳ章訳注研究」『大谷学報』97-2、pp. 83-103。
- [2018b] 「蔵訳『阿闍世王経』第Ⅺ章前半部分訳注研究」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第35号、pp. 163-183。
- [2019] 「蔵訳『阿闍世王経』第Ⅲ章前半部分訳注研究」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第36号、pp. 103-122。
- 宮林昭彦・加藤栄司訳 [2004] 『現代語訳南海寄帰内法伝—七世紀インド仏教僧伽の日常生活』法蔵館、京都。
- 村上真完校註 [1994] 「阿闍世王経」『阿闍世王経・文殊師利問経他』(新国訳大蔵経9「文殊經典部」1)、pp. 36-89、249-350。
- 彌永信美 [2002a] 『大黒天変相』(仏教神話学1)、法蔵館、京都。
- [2002b] 『観音変容譚』(仏教神話学2)、法蔵館、京都。
- (本研究はJSPS科研費JP16K16694の助成を受けたものである。)

【蔵訳『阿闍世王経』 第三章後半部分訳注】

第三章 鉢をめぐる奇蹟と文殊・釈尊の前生（承前）

§12 光尊菩薩の問いと光明王如来の答え

そこで、その光明王如来に随侍するもので、菩薩・大士でプラバーシュリー（光尊⁴）というそのものは、その〔光明王〕如来に次のように申し述べた。

「世尊よ、その手からこれら幾百千もの光明が現れつつ、幾百千ものパドマの花も現れて、すべてのパドマの花に如来のお身体がお座りになりつつ、釈迦牟尼世尊への讃歎を語ったところの手は、このように見るならば喜ばしいものであり、このように好ましいことをなす、それ（=手）は誰のものですか」

そのように申し述べると、〔光明王〕世尊は光尊菩薩に次のようにおっしゃった。

「光尊よ、上方で、この仏国土より七十二のガンガーの川岸の砂ほどの仏国土を超えたところに、娑婆世界というそこにおいて、世尊・如来・阿羅漢・正等覚者である釈迦牟尼というものがおられ、とどまり、日を送りされている。そこでは、菩薩・大士の文殊師利法王子というもので、不可思議なる鎧を身につけ、神通力と力と波羅蜜すべてを獲得したものがいる。すなわち、その文殊師利法王子はこの鉢を探すために、座より立ちあがることなく手を遣わした」

§13 光明王如来の威神力

そこで、光明王如来のその仏国土において、彼ら菩薩は熱望して、

「世尊よ、私たちはその娑婆世界と、その釈迦牟尼如来、その文殊師

4 'od kyi dpal: *Prabhāsī. 【識】「光尊」【護】「光英」【天】「光幢」一方【放】では「刹中諸菩薩」とし、特定の菩薩の固有名は挙げない。

利法王子を見ることを望む⁵」

と、そのように言った。

そこで、光明王如来は眉間の白毫から光を発すると、その光は七十二ガンガー河の岸の砂と等しいそれら仏国土すべてを貫いた。すなわち、〔その間に〕存在するすべての世界は大光明によって満たされた。その光明が身体に当たったところの衆生、彼らすべては転輪王の安樂をそなえたものとなった。その光明が身体に当たったところの実践者 (*yogācāra)、彼らすべては果報を得たものとなった。その光明が身体に当たったところの有学のものたち⁸、彼らすべては八解脱 (*aṣṭavimokṣa) において禪定を修する阿羅漢となった。その光明が身体に当たったところの菩薩、彼らすべてはス

5 【識】では、菩薩たちの言葉の冒頭に「喉の渴いた人が飲むことを欲するように」という譬喩が挿入される。

6 *smin mtshams kyi mdzod spus: ūrñākeṣa/ūrñākoṣa* (LCTSD 1878) *ūrñākeṣa* については BHSD s. v. 参照

7 如来の「眉間の白毫」(*ūrñākeṣa/ūrñākoṣa*) より光明が発せられて、それが諸方世界を照らすという記述は、BHSD p. 150a にもあるように、大乘經典において頻出する記述のひとつである。ここでは、〈法華經〉Ch. XXIII「妙音菩薩品」にみられる用例を掲げる。

atha khalu bhagavān Śākyamunis tathāgato ṛhan samyaksambuddhas tasyām velāyām mahāpuruṣalakṣaṇād bhrūvivarāntarād ūrñākoṣāt prabhām pramumoca/ yayā prabhayā pūrvasyām diśy aṣṭādaśagaṅgānadīvālikāsāmāni buddhakṣetrakoṭī nayutaśatasahasrāṇy ābhayā sphuṭāny abhūvan/ (SP 423.1-3)

「さて、世尊・如来・阿羅漢・正等覚者である釈迦牟尼はその時偉大な人物の相（大人相）〔のひとつ〕である眉間の毛の渦から光明を放たれた。その光明によって東方にある十八ガンガー河の砂〔の数〕に等しい幾百・千・ koti・ナユタもの仏陀の国土が、明るく照らし出された」（松濤他訳 [2001: 209] 参照）

また、梶山 [1995] が指摘するとおり、如来の眉間などから発せられた光明がそなえる功德として、光明に照らされることで地獄などの悪趣にいる衆生らの苦しみがのぞかれたり、マールが退散させられたりといった様子もあわせて説かれる記述は、基本的には部派典籍には共有されず、大乘經典に特有のものとして数多くみられる。

なお、【放】ではこれ以降の光明によってもたらされる功德に関する記述を欠く。

ールヤプラディーパ¹⁰という三昧を獲得した。このように、彼ら菩薩たちはその光明王如来のその仏国土からこの娑婆世界と釈迦牟尼世尊、文殊師利法王子、声聞のサンガのすべてを見た。¹¹

§14 娑婆世界における菩薩・大士の行い

そこで、光尊菩薩・大士はこの娑婆世界を見ると、嗚咽しつつ、涙を流して、次のような言葉を言った。¹²

「世尊よ、例えば、泥の中に置かれた無上の価値を有する瑠璃宝珠
〔を見るように〕¹³、まさにそのように、世尊よ、娑婆世界に生まれた彼

-
- 8 *slob pa*: *śaikṣa (MVy 1733) Harrison and Hartmann [2000] でも指摘されているように、Skt.fr. には śaikṣānām bhikṣūnām という語がみえ、【識】および【護】でも「比丘」という表現が認められる。それらに対して、蔵訳には bhikṣūnām に対応する表現は確認できない。
- 9 この箇所、蔵訳での「実践者」および「有学」に関する文言と対応する部分について、【識】および【護】では相違する。すなわち、【識】では「其有凡比丘者得須陀洹，其過三道上者皆有人惟務禪，応時得羅漢」として、「凡比丘」と「過三道上」に分けられ、前者に関しては「須陀洹」を得るとされる。一方、【護】では「諸修行者専精学定，被斯光者悉得道迹。其得禅者悉過三界，獲四証德。其漏尽者得八脱門禅定羅漢，得無著原」と造り、「諸修行者」「得禅者」「漏尽者」の3種に分類される。
- 10 ① *nyi ma lta bu'i sgron ma*: *Sūryapradīpa 【識】「日明三昧」【護】「日光三昧」【天】「日光三摩地門」【放】(欠) ②これに類する三昧名は DKP にも確認できる。拙著 [2012: 17] 参照。
- 11 Harrison and Hartmann [2000] でも指摘されているとおり、Skt.fr. に見える sarvabodhisattvān に対応する表現として、【識】【護】には「諸菩薩」という語が見えるが、蔵訳と【天】には確認できない。
- 12 【放】では、この部分に〈阿闍世王經〉諸本にはみられない記述 (T. 15.449c18-29) が確認できる。すなわち、釈尊の仏国土である「沙訶樓陀」には「火」があること、およびその仏国土の名前の由来が説かれる。その説明として「釈迦利中人罵詈菩薩輕是搯捶者，菩薩忍辱終不加瞋怒，慈哀十方人欲令度脱，皆是菩薩威神所加，菩薩忍辱之恩，故名‘沙訶樓陀’」ということが説かれ、遍照世界の「諸菩薩」の發言として、後続する光尊菩薩の發言に類似したものがみられる。
- 13 高崎 [2009: 下 207ff] によれば、「泥の中に置かれる瑠璃宝珠」の喩えは、いわゆる「自性清浄心」に関する文脈で用いられる用例がいくつか知られる。すなわち、*Ratnagotravibhāga* (RGV) に引用される *Sāgaramatipariprechā* 〈海慧所問

ら菩薩・大士を見ることをなすでしょう」

経)の一節や *Gaṇḍavyūha*、『華嚴経』「離世間品」(No. 278 9.651b7-16; T. No. 279, 10.297a16-25)の一節などが挙げられる。ここではRGVと『八十華嚴』「入法界品」に見られるものを掲げる。なお、高崎 [2009] が指摘するように、サンスクリット本 *Gaṇḍavyūha* の当該箇所の記事が乱れているようなので、『八十華嚴』を用いる。

RGV: syāḍ yathāpi nāma Sāgaramata'narghaṃ vaiḍūryamaṇiratnaṃ svavadāpitaṃ supariśuddhaṃ suvimalaṃ kardama-parikṣiptaṃ varṣasahasraṃ avatiṣṭheta / tadvarṣasahasrātyayena tataḥ kardamād abhyutkṣīpya loḍyeta paryavadāyeta / tatsudhautaṃ pariśodhitaṃ paryavadāpitaṃ samānaṃ tam eva śuddhāvimalamaṇiratnasvabhāvaṃ na jahyāt / evam eva Sāgaramate bodhisattvaḥ sattvānāṃ prakṛtiprabhāsvaratām cittasya prajānāti / tāṃ punar āgantukopakleśopakṣiptāṃ paśyati / tatra bodhisattvasyaivaṃ bhavati / naite kleśāḥ sattvānāṃ cittaprakṛtiprabhāsvaratāyāṃ praviṣṭāḥ / āgantukā e te kleśā abhūtaparikalpasamutthitāḥ / śaknuyām ahaṃ punar eṣāṃ sattvānāṃ āgantukleśāpanayanāya dharma deśayitum iti / (RGV 49.5-12)

「たとえば、海慧よ、よく磨かれ、実に清浄で、全く無垢なる瑠璃宝珠が泥の中に投げ込まれて、千年間とどまっていたとしよう。それから千年経って泥から取り出され、洗い、清められるとしよう。それはよく洗われ、清められ、磨かれたとしても、それはまさに清浄で無垢なる宝珠として自性を捨てることではない。まさにそのように、海慧よ、菩薩は衆生たちの心が本性上清浄であることを知り、さらにそれが客塵煩惱によって汚されていることを見る。その時、菩薩は次のように考える。これら煩惱は衆生たちの心が本性上清浄であることには浸透しない。それらの煩惱は外からやってくるもの(客たるもの)であり、虚妄なることを分別すること(虚妄分別)によって生じたものである。それならば私はこれら衆生たちの客塵煩惱を取りのぞくべく法を説くことができればよいのだが、と」(高崎 [1989: 85-86] 参照)

『八十華嚴』「入法界品」「善男子！如瑠璃宝於百千歲處不淨中，不為臭穢之所染著。性本淨故。菩薩摩訶薩菩提心宝亦復如是，於百千劫住欲界中，不為欲界過患所染。猶如法界性清淨故」(T. No. 279, 10.431c18-22)

本経の当該箇所や *Gaṇḍavyūha*、『華嚴経』「離世間品」では、「宝珠」が「菩薩(の心)」「菩提心」、「泥」が「(清浄ではない)娑婆世界」あるいは「悪所」「不浄処」という対応であるのに対して、『海慧所問経』では「宝珠」が「菩薩の心」、「泥」が「客塵煩惱」という対応であり、比喩における対応がやや異なる。

一方、【放】では、娑婆世界がどのように悪しきところで、修行に困難が伴うかが詳細に叙述されている (T. 15.449c19-450b25)。具体的には娑婆世界が「地獄の火」に喩えられ、そのような娑婆世界に生まれる因縁は宿命悪を取り除くためであるという記述が確認できる。

光明王如来はおっしゃった。

「善男子よ、あなたはそのように言うてはいけません。それはどうしてかという、この〔遍照〕世界において十カルパの間禪定に住しつつ、行じたものよりも、娑婆世界において一午前¹⁴の間、衆生に対して慈しみの心を起こしたならば、それゆえに、このものの福德は大いに増大する。それはどうしてかという、善男子よ、娑婆世界において正法を守るころの彼ら菩薩・大士は、業の障碍とすべての煩惱を清めるであろう¹⁵」

§15 娑婆世界の菩薩たちの問い

そこで、この娑婆世界において、その光に触れたところの彼ら菩薩は〔釈迦牟尼〕世尊に次のように申し述べた。¹⁶

「世尊よ、このように歓喜させつつ、満足させ、すべての煩惱を断たせる、この光明は誰のものですか」

そのように申し述べると、〔釈迦牟尼〕世尊は彼ら菩薩に次のようにおっしゃった。

14 *snga dro gcig; *eka-pūrvāhṇa (MVy 8247)* pūrvāhṇa (Pali: pubbāhṇa)* については、PTSD p. 467 によれば「昼前までの朝、午前中」(the former part of the day, forenoon, morning) とする。一方、対応する漢訳諸本では【識】「從日出至食」(日の出から〔朝〕食まで)【護】「從明晨旦至早食頃」(夜明けから朝食まで)【天】「一念」と造る。

15 この部分の、濁世である娑婆世界でのわずかな期間の実践の方が他の理想的な仏国土での実践よりも効果が高いという記述については、拙稿 [2015] で確認したように、他の文殊系経典に類似する記述が共有され、〈維摩経〉や〈法華経〉にも関連する記述がみられる。なお、【放】では「訶波離摩訶陀惹」という名の仏国土と比較して、娑婆世界での実践の方が「百倍、千倍、万倍、億倍」優れているとされる。さらにその後続部分では、菩薩が娑婆世界に生まれたのは「宿命悪」を取り除くためであることが説き明かされる。

16 【放】では、この箇所において文殊の手が鉢に到達して、諸仏国土が振動し、それに驚いた舎利弗がその振動の理由と鉢の所在を仏に尋ねるという文脈になっており、光明王如来によって発せられる光明は触れられていない。また、同訳ではこの箇所娑婆世界に鉢が戻る、第 17 節での鉢が戻る記述は欠ける。

「善男子よ、下方で、ここ (= 娑婆世界) から七十二ガンガー河の岸の砂と等しい仏国土を超えた、遍照というその世界には、光明王という如来・阿羅漢・正等覚者が現在、おられ、とどまり、日を送りされている。すなわち、その如来によって眉間の白毫から光明が放たれて、その光明によってこの娑婆世界が照らされている」

§16 釈尊による威神力

そこで、〔釈迦牟尼〕世尊に対して彼ら菩薩たちは次のように申し述べた。¹⁷

「世尊よ、〔我々は〕その遍照世界とその光明王如来を見ることを願う」

そこで、足裏の2つの千幅輪からの光明で、七十二ガンガー河の岸の砂と等しいそれらすべての仏国土を超え、貫き、その遍照世界すべてがそれらの光明で満たされるであろう、そのような光明が世尊・如来である釈迦牟尼によって下方に放たれると¹⁸、その光明が身体に当たったところの、彼ら菩薩すべてはスメールパラディーバ¹⁹という三昧を得た。その仏国土 (=

17 【放】では舍利弗が文殊に対して発言する。

18 この箇所に見るように、仏の三十二相のひとつである、足裏の千幅輪から光明が発せられて、他仏国土を照らすという記述は比較的広く仏典に確認できる記述のようである。代表的な用例として『長阿含経』および *Pañcaviṃśatisātasāhasrikā Prajñāpāramitā* 『二万五千頌般若』および『華嚴経』に見られるものを掲げておく。

『長阿含経』【大本経】「二者足下相輪千幅，成就光相照」(T. No. 1.1.5a29)

PvP: tasyādhasāt pādatalayoḥ sahasrābhyāṃ cakrābhyāṃ ṣaṣṭiṣaṣṭīrasmikoṭī-niyutaśatasahasrāṇi niśceroḥ ... yai raśmibhir ayam trisāhasramahāsāhasro lokadhātur avabhāsito 'bhūt parisphuṭaḥ, ... (PvP p. 6.2-11; T. No. 221, 8.1b9-12; T. No. 223, 8.217a10-16; T. No. 220, 7.1c16-28) 「彼 (= 世尊) の両足の下の千幅輪から 66 百千ニユタ・コーティの光が放たれた。(中略) この三千世界はそれらの光に照らされ、明らかにされた」

『六十華嚴』【如来光明觉品】「爾時世尊從兩足相輪放百億光明，遍照三千大千世界、百億閻浮提、百億弗婆提、百億拘伽尼…」(T. No. 278, 9.422b18-20)

初期經典の『長阿含経』にみえるような、単に千幅輪から光が放たれるという記述をもとにして、大乘經典での用例にみるような、千幅輪から発せられる光明によって三千大千世界や他仏国土が照らされる、という記述に発展したものと考えられる。

遍照世界)もまたこの仏国土(=娑婆世界)から見られた。この仏国土(=娑婆世界)もまたその仏国土(=遍照世界)から見られた。²⁰すなわち、例えば、このジャンブードゥヴィーパ(閻浮提)から日と月が見える。まさにそのように、彼ら〔下方の遍照世界の〕菩薩にも〔上方の〕釈迦牟尼如来が見えた。これらの〔上方の娑婆世界の〕菩薩によっても、その世尊・如来である光明王が見えた。すなわち、例えば、天子たちがメール山の頂に留まりながら閻浮提を見るように、まさにそのように、〔上方の娑婆世界の〕菩薩たちは、この〔娑婆〕世界から〔下方の〕世尊・如来である光明王と大いなる鎧を着た彼ら菩薩・大士たち²¹を見た。

§17 文殊によって戻された鉢

そこで、光明王如来の仏国土であるその遍照世界から、虚空の上方より、文殊師利法王子のその右手によってその鉢はつかまされると、幾百千ナユタヤ・コーティの菩薩によって囲まれつつ、敬われて、〔その鉢は〕上方へと抜き出された。²²その手が〔鉢を〕抜き出したころの、それぞれの仏国土

19 ① *ri rab lhun po lta bu'i sgron ma*: *Sumerupradīpa. 【識】「摩訶低三昧具足(三昧者天竺語漢解之名須弥光明)」【護】「須弥光明三昧」【天】「妙高灯三摩地法門」② これに類する三昧名がDKPにも確認できる。拙著[2012: 17]参照。

20 蔵訳諸本のうち、BJNPではこの一文「この仏国土もまたその仏国土から見られた」を欠く。

21 本節にみられる、閻浮提から日と月を眺めるように、およびメール山より閻浮提を見るように、という2種類の比喩は、それぞれの仏国土からそれぞれの仏・如来が発した光明を受けた菩薩たちが獲得した三昧の名称、「スールヤプラディーパ(日光)」と「スメールプラディーパ(須弥光明)」に対応する。

22 彌永[2002b: 88]で指摘されているとおり、これまでみてきたような、文殊が三昧に入り、右手を伸ばして他仏国土に落ちた鉢を取ってくるという、本経第三章にみられる物語は、彌永[2002a: 200-201]で紹介されているように、『十誦律』をはじめとした諸律に共有される、ピンドーラ(寶頭盧)尊者が、杭の上にかけられた鉢を神通力により禪定に入って手を伸ばして取ってくる物語がモチーフになっているとみることができる。「ピンドーラ(寶頭盧)尊者の物語」の平行話・類似話については、彌永[2002a: 216注38]が詳しい。また、後続する部分(注42参照)についても、ピンドーラ尊者の物語の影響をみてとれる。

では〔手から発せられていた〕それらの光明は姿を消した。それらパドマの花も見られなくなった。そして、文殊師利法王子のその右手によってその鉢は掴まれると、この娑婆世界へとやってきて、釈迦牟尼世尊の眼前でその鉢が虚空に放擲されると、文殊師利法王子は世尊の足に頭でもって敬礼して、世尊に次のように申し述べた。

「世尊よ、取ってきた鉢はこちらですので、如来はお受け取り下さい」
世尊もまたその鉢を受け取られた。

§18 下方の諸仏国土より娑婆世界に來訪した菩薩たちの挨拶

そこで、文殊師利法王子の手とともに、この娑婆世界にやってきたところの彼ら菩薩たちは、世尊の足に頭でもって敬礼すると、それぞれの如来の名称から話した。すなわち、

「某の(*amuka) 世尊・如来が〔釈迦牟尼〕世尊に対して、『御病気はなさっていないでしょうか。弱ってはおられませんか。直立されてもおられますか。いつも通りですか。力をお持ちですか。安楽を感じておられますか』とおっしゃっております」

とそのように申し述べた。すなわち、仏がおゆるしになるとそれぞれの座に座った。

§19 文殊と釈尊の過去世における過去仏²⁴

そこで世尊は長老舍利弗におっしゃった。

「それゆえ、舍利弗よ、かつて文殊師利法王子が私にもたらしたところのその恩恵ゆえに、私が恩義を知らないものとして非難すると〔文

23 この箇所挨拶の内容については、第三章前半部分第10節（前稿注34）のものと同一。ただし、【識】では「謝釈迦文仏」と簡略に作り、挨拶の具体的内容には触れない。【放】では、下方世界より昇ってきた菩薩たちがそれぞれ釈尊に供養する様が具体的に描かれるが、各仏国土の如来からの挨拶は言及されない。

24 定方 [1989: 55] 「第9節 文殊師利はシャカムニ仏の恩人」

殊に] 言われたので、聞きなさい。²⁵

舍利弗よ、かつて、過去世の無量百千ナユタヤ・コーティ・カルパの、その果てをも越えたその時に、如来・阿羅漢・正等覚者のアパラージタドゥヴァジャ（無能勝幢²⁶）というものが、アニンダー²⁷という世界に出現した。すなわち、舍利弗よ、その如来の声聞サンガは八万四千²⁸であり、菩薩は一万二千²⁹であった。すなわち、その如来はまさに三乗からはじめて、法を説きつつ、三乗が説き明かされ、六波羅蜜と巧みなる方便が説き明かされるために、その如来は出現した³⁰]

25 ここで第Ⅲ章前半部分の第3節での舍利弗の疑念に対する具体的な回答を行う旨を仏が述べている。ここでも諸訳間の相違が大きく、特に【護】では多くの言葉が補われている。

【識】「向（vr. 属）之所問，用文殊師利所問故，今為汝說之」（あなたによって問われたことは、文殊によっても問われたので、今あなたに次のように説きましょう）

【護】「今且聽斯，善思念之，今為若說。乃去往古吾身造行為菩薩時，則是軟首本所建發。今者所以宣置斯惠。世尊雖食當念疇昔法施之恩」（今このことを聞きなさい。このことをよく思念しなさい。今あなたのために説きましょう。すなわち、かつて私が菩薩として行をなしていたとき、かつて文殊によって始めさせられた。今それゆえ〔文殊は次のように〕宣べて恩恵を明らかにする。『世尊よ、食したとしても昔の法施の恩を思うべきである』と）

【天】「汝今諦聽。當為汝說妙吉祥菩薩過去所行及本因緣」（あなたは今はよく聞きなさい。私はあなたのために文殊菩薩の過去のなしたことと過去の因縁を説きましょう）

26 *mi thub pa'i rgyal mtshan*: *Aparājitadhva (MVy 732, 510 etc.) 【識】「勇莫能勝」
「阿波羅耆陀陀」【護】「莫能勝幢」【天】「無能勝幢」【放】「羅陀那祇」

27 *mi smod pa dang ldan pa*: *Anindā (Cf. MVy 2632) 【識】「無常」【護】「無別異」
【天】「不可毀」【放】（欠）

28 【放】をのぞく漢訳諸本において、声聞の数は「八万四千」で一致する。【放】では「有六万比丘阿羅漢」とする。

29 【護】では「菩薩大士十二億衆」、【放】では「七億二千万人諸菩薩」とするが、それ以外の漢訳諸本では菩薩の数は「一万二千」として蔵訳と一致する。

30 「三乗」の語は【放】をのぞく漢訳諸本に共通して確認できるが、「六波羅蜜」は蔵訳と【天】にのみ、「巧みなる方便」は蔵訳にのみみられる。また、蔵訳には

§20 智王比丘と浄臂童子

(釈尊による前生譚の続き)

「舍利弗よ、また、その時、説法比丘 (*dharmabhāṅakabhikṣu) のジュニャーナラージャ (智王)³¹ というものがいた。そのものは、朝早く (*kalyam) に內衣 (*nivāsana) を着て、袈裟 (*cīvara) と鉢を携えて、托鉢 (*piṇḍapāta) のために、王城 (*rājadhāni) のヴィスティールナ³² というところに行って来ると、そこでそのものは百味をそなえた多くの食物を受け取って獲得した。

また、その時、長者の息子のヴィマラバーフ (浄臂)³⁴ というものは乳母の膝の上 (*utsaṅga) にいたが、その童子はその〔智王〕比丘が遠くからやって来るのを見た。〔その童子はその智王比丘を〕見ると、乳母の膝からおりて、その比丘のいるところへ走っていき、食べ物³⁵ を求めると、その比丘は彼〔の童子〕に糖菓ひとつを与え、彼〔の童子〕はその食べ物に味をしめて、その比丘の後を追うようになると、彼〔の童子〕はやがて無能勝幢如来のいるところに行ってきて近づくと、

みられないものとして、【讖】「於五惡世」【護】「於五濁世」【天】「五濁惡世」という言葉が漢訳諸本で共通する。一方、【放】では如来の教説に関しては具体的には説かれていない。

- 31 *ye shes rgyal po*: *Jñānarāja. 【讖】「慧王」「若那羅耶」【護】「慧王」【天】「智王」【放】「惹那羅耶」
- 32 *rgya chen po dang ldan pa*: *Vistīrṇa (LCTSD 494) 【讖】「惟致国」【護】「弘広国」【天】「廣大」【放】(欠)
- 33 *tshong dpon gyi bu*: *śreṣṭhiputra (MVy 3708) 【讖】【護】では「尊者子」と造り、【天】【放】では「長者子」と造る。
- 34 *dri ma med pa'i dpung pa*: *Vimalabāhu. 【讖】「無垢王」「惟摩羅和耶」(*Vimalarāja) 【護】「離垢臂」【天】「浄臂」【放】「惟摩羅波休」
- 35 【天】では「是時苾芻見，是童子善根純熟是大法器」という一文が挿入されている。
- 36 この箇所において、【護】では「蜜搏欲尽，顧眄乳母，意欲還抱，比丘復授蜜搏，幼童復進」、【放】では「乳母逐護之，小兒噉尽，尽便還顧意欲還去。沙門復取餅授之，兒噉餅逐隨沙門」という記述がみられ、両本では乳母のもとに戻ろうとする童子を引き止めるために比丘が糖菓を再び与えたとされている。

その如來の足に頭でもって敬礼して、〔如來の〕眼前に座った」

§21 托鉢で得た尽きない食物と歡喜する淨臂童子

(釈尊による前生譚の続き)

「そこで、智王比丘は托鉢で得られたものすべてをその童子に与え
と『おお、童子よ、この托鉢〔で得られたもの〕を如來に差し上げな
さい』と言った。そこで、その童子はその托鉢〔で得られたもの〕
を受け取り、その世尊の鉢を満たしても、その托鉢〔で得られたもの〕
は尽きなかった。舍利弗よ、すなわち、その一度の托鉢〔で得られた
もの〕から、その童子が、彼ら八万四千の声聞サンガと彼ら一万二千
の菩薩と、世尊・如來であるその無能勝幢を満足させつつ献上しても³⁷、
その托鉢〔で得られたもの〕は尽きなかった。そこで、その童子は満
足し、喜び、歡喜し、喜悅しつつ、歡喜と愉悅を生じると、世尊の眼
前に座って、次のような偈頌を述べた。³⁹

『比丘サンガが満たされても、托鉢〔で得られたもの〕はいつまで
も尽きないので、布施にふさわしい福田 (**dakṣiṇīya-puṇyakṣetra*)
となったもの (= 仏や菩薩) は、私によって供養されるものとな
った。

世間の保護者 (= 仏)⁴⁰ が満たされても、飯 (**odana*) は尽きること
がなかったのも、仏に献上しても、布施が尽きないのは疑い
ない。

37 【護】ではこの箇所「如是之供至于七日」(このように供養すること七日間にもなった)という語が挿入されている。他訳では後続箇所に出てくる文言が【護】では先に出てきてしまっている。

38 *dga'*: **tuṣṭa* (MVy 2929); *mgu*: **udagra* (MVy 2930); *rangs*: **harṣa* (MVy 2934); *rab tu dga'*: **pramudita* (MVy 2932); *dga' ba dang yid bde ba skyes*: **pritiṣaumanasya jāta* (MVy 2933)

39 【識】の特徴のひとつとして、他本では偈頌(韻文)の部分が散文で記されることが挙げられ、以下の箇所でも散文である。【放】でも比較的簡潔な散文である。

40 *'jig rten mgon po*: **lokanātha* (LCTSD 675)

飯が尽きることなく、繰り返し増大するであろう。まさにそのよ
うに諸仏を敬うところのものの善〔根〕は増大する』

§22 智王比丘による童子の教化⁴¹

(釈尊による前生譚の続き)

「舍利弗よ、そこで、その童子はその一度の托鉢〔で得られたもの〕か
ら、如来で、比丘サンガをともなったものが、七日間、満足されるよ
うに献上されたならば、仏の威神力およびその童子の清浄なる心の意
向によって、その食事は尽きなかつた⁴²。そこで、智王比丘によって、⁴³
その童子は仏に帰依させられ、法に帰依させられ、サンガに帰依させ
られた。〔その童子は〕戒⁴⁴も授けられた。〔その童子は〕過失 (*aparādha)
も告白するようにさせられた。〔その童子は〕歓喜させられるべきも
のたちをも歓喜せしめられた。〔その童子は〕喜ばしむべきものたち
をも喜ばせしめられると、のちに無上正等覚へと発心せしめられた」

41 【放】では第 22 節および第 23 節を欠く。

42 前節第 21 節から続くかたちで語られる、托鉢より持ち帰った食物が多くの人
たちを 7 日間にわたって満足させても全く減らないという物語は、彌永 [2002b:
88] でも指摘されているように、ピンドーラ尊者にまつわる「食物倍増の物語」
に通じるとともに (彌永 [2002a: 204])、『南海寄帰内法伝』巻第一 (T. No. 2125,
54.209b24ff) に語られる、マハーカーラ (大黒天) による食物倍増の奇跡譚とも
通じる (彌永 [2002a: 89-90] および宮林・加藤 [2004: 68-69] 参照)。また、彌
永 [2002b: 88] でも指摘されているように、本経第 IX 章にも、文殊らの一行を阿
闍世王の宮殿で接遇する際、類似の「食物倍増の物語」がみられる。

43 【讖】では「其仏阿波羅耆陀陀教導其兒」というように、無能勝幢仏がその童子
を導いたという記述がみられる。一方、蔵訳を含む他本では、智王比丘が童子を
導いたという記述である。

44 *khirms*; *sīla に対応する蔵訳は通常 *tshul khirms* であるが (MVy 915, 1567, 1959
etc.)、ここでは【讖】「授与五戒」【護】「令受禁戒」【天】「受仏戒法」を参照して、
ここの *khirms* は「戒」と解釈する。

§23 童子の父と母

(釈尊による前生譚の続き)

「舎利弗よ、そこで、その童子の父と母がその童子を探しつつ、無能勝幢如来のおられるところにやって来て近づくと、世尊の足に頭でもって敬礼して、眼前に座った。そこで、その童子は彼ら父母の足に敬礼してから、次のような偈頌を述べた。

『すべての衆生 (*dehin) における安楽のために、私は菩提に入ったので、あなた [たち二人] もよく安定したもの (*susamsthita) として、恵まれた生まれを得ることは実⁴⁵に希有である。

仏のお身体^{からだ}は光り輝き、[三十二] 相によっても荘厳されているのを見よ。智慧によって到達したその菩提を誰が希求しないだろうか。

如来は実⁴⁵に希有である。私は家あるものから家なきものへと今まさにここにおいて出家する。あなた方お二人はお認めください』
父と母は言った。

『我々二人はあなたを認め、[我々二人も] 優れたさとりを希求することをなし、出家することをなすために、息子よ、あなたを見習う』

舎利弗よ、以上のように、その童子とその童子の父母、および、さとりにへと発心した五百の人々、彼らすべてが出家した⁴⁶』

§24 比丘と童子の正体

(釈尊による前生譚の続き)

「舎利弗よ、その時における説法比丘の智王という、そのものを他の

45 *dal 'byor*: *kṣaṇasampat (Negi 2197) *kṣaṇa* (恵まれた生まれ) については BHSD s.v. 参照。

46 【護】では、この後に「時仏教之行菩薩道：六度無極、四等、四恩、分別解空、精進不懈、自致得仏」という、他訳にはみえない具体的な文言がみえる。

誰かであると思い、舍利弗よ、あなたはそのように見てはいけない。それはどうしてかという、この文殊師利法王子は、その時における説法比丘の智王というものであった。舍利弗よ、その時における長者の息子の浄臂という、そのものを他の者であると思って、疑い、あるいは猜疑し、あるいは疑念を生じて、舍利弗よ、あなたはそのように見てはいけない。それはどうしてかという、私 (= 釈迦牟尼仏) がその時における長者の息子で、浄臂というそのものであった。すなわち、舍利弗よ、文殊師利法王子が托鉢〔で得た食物〕を私に与えると、〔私は〕さとりにと発心せしめられた。すなわち、それが、私が初めてさとりにと発心した〔時〕である。

すなわち、舍利弗よ、以上の法門によっても次のように知られるべきである。如来には、仏としての偉大性 (**buddhamāhātmya*) と、十方と無畏、無碍なる智がそなわっており、いかなることも可能である。すなわち、そのすべては文殊師利法王子によってなさしめられたことからなるものとして見られる。それはどうしてかという、その〔さとりにへの〕発心から一切智者〔性〕を得るからである」

47 *the tshom*: **saṃśaya* (MVy 362); *yid gnyis*: **vimati* (MVy 2130); *som nyi*: **kāṅkṣā* (MVy 2129)

48 この一段以降を、定方 [1989: 59] では「第 10 節 文殊師利は菩薩の父母」とする。定方 [1989] がもとづくところの【識】では、ここで釈尊の発言が区切られており、蔵訳でも上記訳出したように「以上の法門によっても」云々という文言がみられるので、ここで節を区切ったほうが適当かもしれない。けれども、蔵訳では形式上は一文としてつながっているので切らずにおく。

49 *stobs bcu*: **daśabala* (MVy 25); *mi 'jigs pa*: **vaiśāradya* (MVy 130); *ye shes chags pa med pa*: **asaṅgajñānam* (MVy 186)

【識】では「無碍の智」を「其智慧不可思議」とし、【護】では「十八不共」という語がみえる。また、【識】【護】とも「無畏」については「四無畏」とする。

50 蔵訳では単に「十方において」とするが、【識】「不可数阿僧祇刹土」【護】「不可称限、不可計会諸仏国土」とする。

§25 文殊は諸仏の母

(釈尊による前生譚の続き)

「舎利弗よ、十方において⁵⁰、私自身と同じく、如来であって、文殊師利法王子によってさとりへ決定したところの、不可量で無数の釈迦牟尼というものと同様に、ティシュヤ⁵¹というもの、プシュヤ⁵²というもの、シキン⁵³というもの、ディーパンカラ⁵⁴というものたちを私は見る⁵⁵。すなわち、文殊師利法王子によってさとりへと決定されて、現在法輪を転

-
- 51 この部分の話者は釈尊であり、「私自身」というのは「釈迦牟尼仏」のことを指す。その「私自身=釈迦牟尼」とは別に「無量無数の釈迦牟尼というもの」がいるとする内容である。【護】と【天】ではそれぞれ「同号能仁」「同名釈迦牟尼仏」としており、それらもこの点には自覚的であったことが窺える。また、前注のように【識】【護】では「無量無数」という言葉は「仏国土」を修飾するかたちであらわれ、その「無量無数の仏国土」において、「釈迦牟尼」や後続の過去仏の同じ名称を持つ仏が無数にいる、という記述である。
- 52 *ti sha: *Tiṣya; rgyal ba: *Puṣya* (Negi 775) 【識】「提式沸仏」【護】「或号咸聖、或号明星」【天】「底沙如来、弗沙如来」【識】ではこの2つの仏名を分けて考えておらず、単一の複合語のようにして解釈しているようである。これら2つの仏名は過去仏としてならんで言及されることが多い。BHSD 254a, 350a 参照。
- 53 *gtsug ldan: *Śikhin* (Negi 4687) 【識】「式仏」【護】「所歎」(?) 【天】「尸棄如来」過去七仏の中では、通常、*Vipaśyin* と *Viśvabhū* の間に挙げられる第二の過去仏。BHSD 528a 参照。
- 54 *mar me mdzad: *Dīpaṃkara* (MVy 95) 【識】「復有号提和竭仏」【護】「或名錠光」【天】「然灯如来」「燃灯仏 (*Dīpaṃkara*)」は釈尊の前世において仏になるという授記を与えた過去仏として有名。本経第XII章でも、燃灯仏が授記を与えた場所に塔を作ることに関する記述があらわれる。詳しくは拙著 [2012: 63ff] 参照。
- 55 以上、「釈迦牟尼」に続く、4名の如来はいずれも過去仏として広く知られているが、この箇所では冒頭で「十方において」とされ、現在の他仏国土における仏の名称として登場している。一方、【天】では如来名が列挙されるまえに「過去」という文言が挿入され、「我於無量劫中称讚其名」とする。列挙される仏名に関しては、【天】では順序がやや異なるものの、いずれの訳でも上記4名は確認できる。一方、【識】では「惟衛仏」(**Vipaśyin*)、【護】では「離漏」「妙勝」というように、他訳には対応がみられないものが現れる。また、【放】では、上述のような過去仏の具体的な名称は挙げられず、「前過去無央数諸仏皆是文殊師利弟子、当来者亦是其威神恩力所致」とし、〈阿闍世王経〉諸本のように現在他方仏を話題とはせずに、過去や未来といった時間軸に注目した教説がみられる。

じているところの彼ら如来のお名前も、一カルパ、あるいは一カルパ以上（残りのカルパ⁵⁶）の間に説いても尽きないであろうならば、菩薩のなすべきことをなしたところのものたちについては言うまでもなく、トウシタの住処に住するところのものたちについては言うまでもなく、生まれたものたちについては言うまでもなく、出家したものたちについては言うまでもなく、苦行をなすものたちについては言うまでもなく、菩提樹のもとに坐すものたちについては言うまでもない。すなわち、舍利弗よ、以上の法門によっても次のように理解されるべきである。すなわち、菩薩たちにとっての母⁵⁹であり、生んだものであり、悲

56 *bskal pa'i lhag ma lus*: *kalpāvaśeṣa (LCTSD 1542) BHSD s.v. および高崎 [1993: 200] によると、この言葉の出典は阿含『涅槃經』であり、「アーナンダよ、如来はもし欲するならば、一劫の間あるいは一劫以上〔この世に〕留まることができるであろう」(ākāṅkhamāno ānanda tathāgato kappam vā tiṭṭheyya kappāvesam vā) という有名な文言に由来するようである。パーリの注釈によれば、kappāvesam というのは、「百歳以上」(vuttavassasatato atirekam) という意味であり、kalpa を「寿劫」=百歳として解釈する。しかし、後代の注釈や大乘仏典では kalpa を「(百歳よりも長い) 非常に長い時間」の意味に取って、kalpāvaśeṣa を「残りのカルパ」と解釈するようである。漢訳諸本では、【識】「從劫至劫未有竟時」【護】「今我一劫，若過一劫」【天】「無量劫中」とし、【護】では上述の阿含『涅槃經』における解釈に近いものを採用しているようである。

57 ここでは蔵訳諸本のうち、LSTU にみられる *brjod kyang zad par mi 'gyur na* という読みを採用する。上記の LSTU の読みは漢訳諸本での【識】「猶不可尽」【護】「不可称限」「不可限喻」とも対応する。他の資料の読みを採るならば、「～の間に説いたならば」(*brjod par gyur na*) あるいは「～の間に説くであろうならば」(*brjod par 'gyur na*) として、以下に続くが、そのような表現では、文殊がさとりへと導いた仏、菩薩の数が非常に多いことを述べる文章にはならず、文意も明確でない。LSTU や漢訳諸本のように、「一カルパ、あるいは一カルパ以上（残りのカルパ）の間に説いても尽きることがない」とした方が文殊の偉大性を伝える文章としてより明確である。

58 この一段で列挙される、仏あるいは菩薩のあり方については諸本でやや相違する。漢訳諸本にのみみられる記述としては、【識】「中有般泥洹者」「中有在母腹者」「中有成仏者」および【護】「或有退來入母胞胎」「或処道場成最正覺」が挙げられる。一方、【放】ではこの一段の記述が欠けている。

59 ①【識】【護】ともに「菩薩之父母」とし、【放】でも「仏道中父母也」とする。また、【識】では「是則為迦羅蜜 (*kalyānamitra)」という語がこの直後に見られる。

心をそなえたものであり、なさしめるもの⁶⁰である、と正しく説かれ、説示されるどころの、それらはまさに文殊師利法王子について説かれ、説示される。すなわち、舎利弗よ、彼(=文殊)を因とし、彼を縁とするものである。すなわち、過去に「文殊によって私は」助けられたので、文殊師利法王子は私に対して恩義知らずとして非難する」

§26 二百の天子の改心⁶¹

そこで、二百の天子たち⁶²は次のように考えた。すなわち、

②この箇所「菩薩」は文脈上、既に仏になることが決まっている「菩薩」であることは明らかである。文殊を仏の母や菩薩の父母とするような記述については、他に以下のようなものが知られる。

Gaṇḍavyūha: mātā mañjuśrīḥ kumārabhūto buddhakoṭīniyutaśatasahasrāṇām / avavādako mañjuśrīḥ kumārabhūto bodhisattvakoṭīniyutaśatasahasrāṇām (Gv p. 418)

「文殊師利法王子は百千コーティ・ニユタの仏たちの母である。文殊師利法王子は百千コーティ・ニユタの菩薩たちの指導者である」(梶山・丹治 [1994: 下 409] 参照)

『善住意天子所問經』(**Suśhīmatidevaputra-pariprcchā*): *byang chub sems dpa' 'jam dpal gzhon nur gyur pa zhes bya ba mthu che ba/ shes rab che ba/ brtson 'grus che ba/ byang chub sems dpa' rnam yang dag par ston par byed pa/ byang chub sems dpa' rnam yang dag par 'dzin du bcug pa/ byang chub sems dpa' rnam yang dag par gzengs bstod pa/ byang chub sems dpa' rnam yang dag par rab tu dga' bar byed pa/ byang chub sems dpa' rnam kyi pha'i go 'byed pa/ byang chub sems dpa' rnam kyi ma'i go 'byed pa* (D No. 80, dkon brtsegs, Ca 288a4-6 / T. No. 341, 12.116c24-27/ T. No. 342, 12.135b7-9; 漢訳『大宝積經』所収本には対応箇所なし)

「菩薩で文殊師利法王子というものは力もすぐれ、智慧もすぐれ、精進もすぐれ、菩薩たちに正しく開示するものであり、菩薩たちを正しく包摂するものであり、菩薩たちを正しく歡喜させるものであり、菩薩たちにとっての父の位置にあるものであり、菩薩たちにとっての母の位置にあるものであり(後略)」

60 *byed du 'jug pa*: **kārāpaka* (MVy 4678) BHSD 179b 参照。

61 【天】では本節と次節の順序が入れ替わっている。

62 前稿注9と同様に、【護】では「千二百諸天子」、【放】では「切利天上二百菩薩」とする。

「一切法は因に随うものである (*anvaya)。〔一切法は〕縁に依拠するものである。〔一切法は〕渴愛 (*trṣṇā) という根本を持つ。〔一切法は〕誓願 (*praṇidhāna) によって導かれるものをそなえたものである。すなわち、この〔釈迦牟尼〕世尊もまた他者 (= 文殊) によって奮起されたもの (*udyojita) であるならば、現におられる如来のように、我々が劣ったものについて思うそのことは不適切である」

と考えた。そこで、彼ら二百の天子は優れた意向によって無上正等覚へと発心した。

§27 宝蓋より発せられる音声

今ここにおいて、手が伸ばされつつ、神通力が示された神変を文殊師利法王子が示し、鉢を掴み、そして、ここにおいて古の教えが〔釈尊^{いにしえ}によって〕説かれた時に、下方の仏国土とこの〔仏国土〕から無数の衆生がさとりへと発心した。十方の無量の仏国土からも文殊師利法王に対して供養の

63 *mngon par bzhugs*: この部分はやや難解である。【護】での「在如来前」(如来の前にあって)が対応するか。

64 この箇所のように、傘蓋が世間をひろく覆うとする記述はいくつかの大乗經典でも確認できる。ここでは〈阿闍世王経〉との関連も窺える以下の2経の用例掲げる。

『文殊師利功德莊嚴経』(**Mañjuśrī-buddhakṣetra-guṇavyūha*): *de de'i tshe ji lta bu'i rdzu 'phrul mngon par 'du bya ba mngon par byas pas stong gsum gyi stong chen po'i 'jig rten gyi khams 'di rin po che'i gdugs gcig gis khebs par gyur pa dang/ rin po che'i gdugs de las kyang me tog rnam pa sna tshogs kyi char rab tu 'bab/ sil snyan brgya stong yang 'khrol* (D No. 59, dkon brsegs ga 264a5-6; T. No. 310 (15), 11.340c11-13; T. No. 319, 11.906c25-27; 竺法護訳 (T. No. 318) に対応箇所は見出せない)

「そのもの(釈迦牟尼世尊)はその時、どのような神通力をあらわそうかと考えて、この三千大千世界がひとつの宝蓋によって覆われ、その宝蓋からも種々の花が降り注ぎ、百千もの鏡が打ち鳴らされた」

DKP §8A: *de nas mi 'am ci'i rgyal po ljon pa'i bu brgyad stong pos rin po che'i pad ma bkod pa dang/ rin po che'i gdugs brgyad stong du tsang bas bcom ldan 'das la mngon par bkab ste/ gtor ma thag tu sangs rgyas kyi mthus de dag thams*

行いがなされ、法の守護がなされるために、諸々の仏・世尊によって宝蓋が与えられた。すなわち、それらの宝蓋によってもこの世界は覆われた。⁶⁴
その宝蓋からもまた、

「その通りである。釈迦牟尼如来がお説きになったとおりである。すなわち、我々 (= 他仏国土の諸仏・世尊) すべてもまた文殊師利法王子によってさとりに決定された」

と語る音声が発せられた。⁶⁵

(鶴見大学仏教文化研究所准教授・元大谷大学任期制助教 仏教学)

〈キーワード〉 普超三昧経、竺法護、支婁迦讖

cad 'khor gyi khyams der bcom ldan 'das kyi dbu'i drang thad kyi steng gi bar snang la dpag tsad stong tzam na rin po che'i gdugs gcig tu gnas par gyur to//

「そこで大樹緊那羅の八千の子らは宝のパドマを配列し、宝蓋八千によって世尊の頭上を遍く覆い、[それらが] 広がってまもなく仏の威神力によってそれら全てはその周廊 (*maṇḍalamāḍa) において世尊の頭の真上の虚空百〇〇ジャナにおいてひとつの宝蓋となった」

また、いわゆる「ヴァイシャーリー疫病譚」における、釈尊への傘蓋供養も種々の仏典で共有され、上記のような傘蓋の奇跡の記述とも関連が窺える。詳しくは松田 [2002] 参照。

65 この箇所同様、傘蓋より音声が発せられるという記述も複数の仏典に確認できる。ここでは *Lalitavistara* と **Akṣayamatīnirdeśa* にみられるものについて掲げておく。

Lv: *upasaṃkramya bodhisattvasya pūjākarmaṇe ekaratnachatrena taṃ sarvāvantaṃ maṇḍalamātraṃ saṃchādayati sma / tatra śakrabrahmalokapālāḥ parasparam etad avocan - kasyedaṃ phalam, kenāyam evaṃrūpo ratnachatravyūhaḥ saṃdṛṣyāta iti / atha tasmād ratnachatrād iyaṃ gāthā nīscarati sma* (Lv Ch. XX p. 291.9-11; T. No. 187, 3.588b7-11)

「近づいて、菩薩に対する供養の行いとして、ひとつの宝蓋によって、かの菩提座を普く覆った。その時、シャクラやブラフマン、ローカパーラたちは

互いに次のように言った『この果報は誰のものであり、このような宝蓋による莊嚴は誰によって表されたのか』そこでかの宝蓋より次のような偈が発せられた」(なお、このあとに、宝網や莊嚴、樓閣なども菩提座を覆う描写が続き、それらからも、宝蓋と同様に、偈頌が発せられる記述がみられる。)

AksN: *de nas phyogs bcu nas rin po che'i ras bcos bu dang, rin po che'i gdugs dang, rin po che'i ba dan dang, rin po che'i lda ldi rin po che'i spang rgyan dang, rin po ches spras pa'i dar gyi lda ldi dag 'ong bar snang ste. de dag 'ongs nas byang chub sems dpa' blo gros mi zad pa'i lus la mngon par 'gebs par byed de, rin po che'i ras bcos bu dang, rin po che'i gdugs dang, rin po che'i ba dan dang, lda ldi rin po che'i spang rgyan can de dag las: blo gros mi zad pa, legs so, legs so! blo gros mi zad pa, khyod kyis mi zad pa'i sgo'i le'u legs par smras te, khyod kyis legs par smras pa la rjes su yi rang ngo! zhes sgra byung ngo* (AksN p. 154; T. No. 403, 13.611a7-11; T. No. 397, 13.211b29-c5)

「そこで十方より宝布と宝蓋、宝幡、宝飾、宝華、宝で飾られた絹で結ばれた帯 (*paṭṭadāma) がやってきて現れ、それらはやってきて無尽意菩薩の身体を覆い、それらの宝布と宝蓋、宝幡、宝飾、宝華から『よきかな、よきかな、無尽意よ。無尽意よ、あなたは尽きない法門の章をよく説いた。すなわち、あなたによって説かれたことに歓喜している』という声が発せられた」

表 1 〈阿闍世王經〉第三章後半部分 漢訳・藏訳諸本対照表

	T. 626	T. 627	T. 628	T. 629	A	B	Ba	Bth	D	G	Hi	J	L	N	P	Ph	S	T	U
\$12	393b12	411c25	434a1	449c12	51a11	294a5	97a4	64a8	225b5	12a5	92a2	249b3	293a4	361b3	236a3	27a1	286b6	266b8	256b7
\$13	393b18	412a1	434a12	449c16	51b4	294b3	97b5	64b4	226a2	12b1	92b2(-7)	250a1	293b4	362a3	236b1	27b1	287a6	267a7	257a6
\$14	393b27	412a12	434a21	449c18- 450a13	51b9- (51b11)	295a3	98a6	64b9-	226a7	12b8-	—	250a8	294a5	362b5	236b7	28a1-7	287b6	267b7	257b6
\$15	393c5	412a21	434b4	450c25	—	295a8	98b5	65a5	227b4	13a3	—	250b4	294b3	363a5	237a4	28a7	288a5	268a5	258a4
\$16	393c10	412a28	434b10	450c4- 14	—	295b4	99a3	65a9	226b7	13a7	—	250b8	295a1	363b2	237a8	28b5	288b2	268b2	258b1
\$17	393c16	412b11	434b24	—	—	296a3	99b4	65b6	227a6	13b5	—	251a7	295b2	364a3	237b7	29a6	289a3	269a3	259a2
\$18	393c20	412b16	434c2	450c14	—	296b1	100a3	66a2	227b3	13b10	—	251b4	295b8	364b2	238a3	29b5	289b1	269a8	259a8
\$19	393c23	412b21	434c8	450c22	—	296b4	100a7	66a4	227b5	14a3	(95a1-)	251b6	296a3	364b6	238a6	29b8	289b4	269b3	259b4
\$20	393c28	412b29	434c15	450c26	(53a1-)	297a1	100b5	66a8	228a1	14a8	95a5	252a2	296b1	365a4	238b2	30a6	290a2	269a8	260a1
\$21	394a6	412c9	434c24	451a5- 11	53a3	297a5	101a3	66b3	228a4	14b2-4, 16b8-	(-95b7)	252a6	296b6	365b2	238b6	30b3	290a6	270a5	260a6
\$22	394a16	412c21	435a8	—	53a7	297b3	101b3	66b7	228b2	17a2	—	252b4	297a5	366a2	239a4	31a3	290b5	270b4	260b4
\$23	394a20	412c25	435a13	—	53a11	297b7	101b6	67a2	228b4	17a5	—	252b7	297b1	366a6	239a7	31a7	291a2	270b7	260b8
\$24	394b2	413a10	435a26	451a12	53b4	298a5	102a5	67a6	229a1	17b1	—	253a4	297b7	366b6	239b3	31b5	291a7	271a5	261a6
\$25	394b9	413a19	435b8- 19	451a16	53b8 (-53b11)	298b3	102b5	67b2	229a5	17b6	—	253a8	298a6	367a5	239b8	32a3	291b6	271b3	261b4
\$26	394b21	413b4	435b24- c2	451a19	—	298b8	103a5	67b7	229b3	18a2	—	253b5	298b5	367b5	240a6	32b3	292a5	272a2	262a3
\$27	394b25- c2	413b10- 18	435b19- 23	451a25- 28	—	299a3- 8	103b1- 5	67b8- a3	229b5- 230a1	18a5-9	—	253b8- 254a3	298b8- 294a5	378a1- 6	240a8- b4	32a6- 33a3	292b1- 5	272a5- b1	262a6- b3